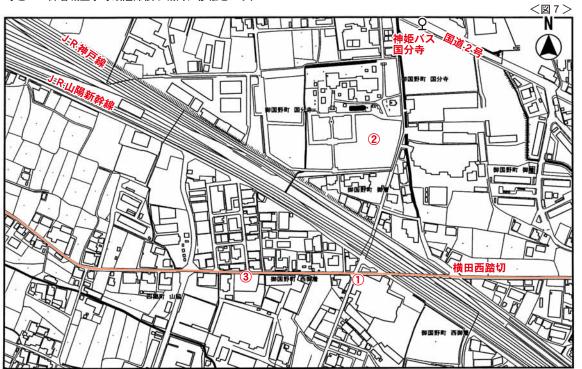
姫路市文化財保護協会

①福乗寺(真宗大谷派、もと英賀本徳寺三道場の一つ天川道場)、②旧飾磨郡・印南郡境(御着城門跡という)、③大歳神社(御着の氏宮)、④延命寺(天台、境内に貞和元年(1345)銘の板碑)、⑤法華寺(日蓮宗、天正年間に日登開基)、⑥小原家住宅(市都市景観重要建築物等)、⑦御着本陣跡(御着公会堂、御着は西国街道の宿駅)、⑧御着城本丸跡(御着城跡公園)、⑨御着城二の丸跡(御着城跡グラウンド)、⑩旧天川橋移設地、⑪市指定史跡「黒田家廟所」(御着城本丸跡、享和2年(1802)福岡藩主建立)、⑫小寺大明神(御着城本丸跡、小寺政隆・則職・政職を祀る)、⑬高札場跡、⑭天川橋(文政11年建造の竜山石製旧天川橋は昭和47年損壊)、⑮徳證寺(本願寺派、もと真言の国分尼寺で金剛尼寺といい御着城主小寺政隆帰依し城内に移転という)



①道標(国分寺参道分岐点)、②国指定史跡「播磨国分寺」(山号牛堂山、天平 13年(741)諸国に国分寺建立の詔、七重搭基壇あり、本堂東に県指定文化財「石造宝篋印搭」(室町時代、花崗岩製)、③一里塚跡(明治に至るまで高さ2 気の塚があったと伝わる)

『西国街道』をたずねて その1

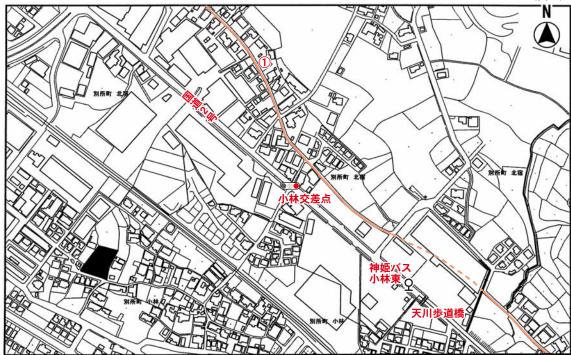
「西国街道」は「山陽道(近世山陽道)」、「中国街道」、「中国路」、「西国往還」とも単に「往還」とも呼ばれ、近世(江戸時代)には五街道につぐ主要な街道でした。五街道は幕府道中奉行直轄でしたが、その他の街道は沿道諸藩の整備によることもあり、実は起点・終点や宿駅等が定まっていたわけではありませんでした。西国街道の起点は京都東寺口、大坂、西宮(京都からの山崎街道と大坂からの道の合流地点)、終点は赤間関(下関)、小倉、長崎ということもあり、街道の名称も各地で様々な呼び方もされます。例えば姫路城下町備前門より西に向かう西国街道は「備前道」と記載されることがあります。さて、古代から用いられる「山陽道」の名称は、天武天皇14年(685)に「山陽」、大宝3年(703)に「山陽道」が初見であり、これは古代律令国家が全国を五畿七道に区分した地方行政区画を意味しています。律令国家は七道各道に駅家を設置して都から各国の国府に通じる駅路(官道)を整備し、10世紀の「延喜式」(律令の改正法施行細則集)で、駅路は大路・中路・小路と規定し、都と太宰府を結ぶ駅路が唯一の大路とされ地方行政区画と同じ名称である「山陽道」と記されるに至ります。

古代山陽道は駅路(官道)でしたが、中世に至るまでに駅制の維持は困難となり、その後自然環境の変化、中世的な町の形成、瀬戸内海航路の発展、蒙古襲来に伴う道路整備など様々な要因からルートは変遷したとみられます。さらに近世(江戸時代)に至って、城下町の建設、河川つけ替えや改修、宿駅整備などの要因からルートは変遷しており、各時代のルートの特定や変遷は難しいことが現状です。特に戦後の高度経済成長以降、開発、圃場整備、区画整理、道路の新設・拡幅・鋪装などで社会資本の充実が図られる一方で道の姿も一変しました。

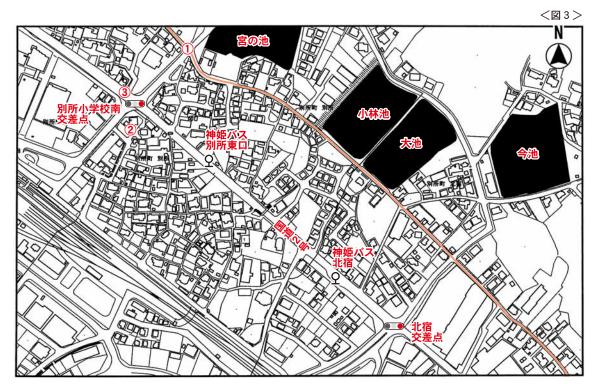
ここでは姫路市域の西国街道を東から西にたどり、ルートは実線(— 一)で示し、消滅や推定は破線(– – ー)で示します。沿道の文化財は丸数字($12\cdots$)、主な国道・河川・交差点やバス停等を赤字で記します。

①地蔵堂 ②一里塚跡 (注)右下の図外、阿弥陀池(姫路に名残を惜しむ地、なみだ池とも)、JR 曽根駅北側に5基の道標(昭和45年陸橋建設に伴い大日山南麓の曽根・高砂道との分岐点から移設)、①②は高砂市域

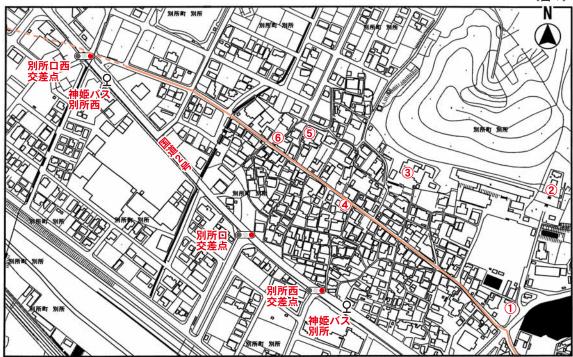
<図5>



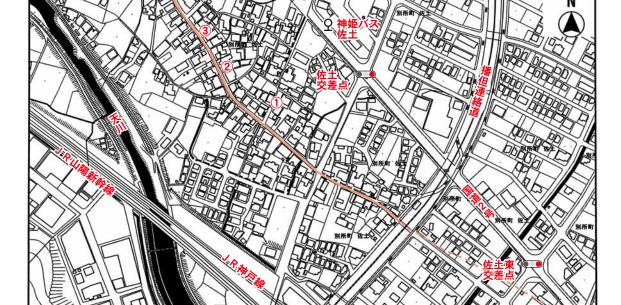
①六騎塚(頼山陽は文政10年(1827)仁寿山校講義を終え京都に戻る際に阿弥陀駅跡(場所は特定できない)で南朝忠臣 児島範長を顕彰する漢詩を読み石碑を建立して山陽道を照らして欲しいと記す、姫路藩家老河合寸翁は北宿村に足利尊 氏に抗した六騎のうち児島範家の子孫がいることを知り石碑建立を働きかけたという、藩の許可を得て嘉永4年(1851)に 漸く建立された。なお「印南郡誌」は阿弥陀村大日寺の範長の墳墓を誌す。)



①別所村道路元標(西国街道と日吉神社参道交差点、大正8年(1919)旧道路法で市町村に設置を義務附けられた、姫路市道路元標は福中町に設置されたが所在不明)、②実際寺(推定別所構居東辺)③別所構居跡(城主大塩半左衛門尉、天正6年(1578)落城という)



①日吉神社雨乞開眼常夜灯(明治20年)、②日吉神社(別所西地区の氏宮、秋季例祭に市指定重要無形民俗文化財「別所西獅子舞」が奉納される)、③安養寺(曹洞宗、安養寺僧徒は御着城に籠城、天正7年(1579)信忠・秀吉は御着城周辺、別所村を焼き払ったという)、④別所西地区の塞の神(道祖神ともいい、住民にとっては災厄から村を守り、旅人にとっては道中の安全を祈願するもの)、⑤宝量寺(真宗本願寺派、永禄4年(1561)頃、道場創建という)、⑥弁慶地蔵(泡子地蔵ともいう、弁慶の母がこの地の出身という、本尊は天文22年(1535)銘の地蔵坐像、堂前に享保8年(1723)銘の巡礼三十三度供養塔)



①佐土の地蔵堂、②佐土の塞の神(東)、③佐土の塞の神(西)、(注)佐土は戦国時代、御着城東側にあり佐土の市がたてられていた